平成２９年度日本農林漁業振興会会長受賞者受賞理由概要
畜産部門

搾乳ロボット、草、牛フル活用！ゆとりの酪農

〇氏名又は名称　村越　敏春、村越　晴子

〇所　　在　　地　北海道厚岸郡浜中町

〇出　　品　　財　技術・ほ場（飼料生産）

〇受　賞　理　由

・地域の概要

浜中町は、北海道東部の釧路市と根室市のほぼ真ん中に位置し、酪農と漁業が基幹産業である。冬は気温が－15℃以下になる厳しい地域であり、町の北部はほぼ全域が酪農地帯で、15,000haの牧草地に人口の倍以上の乳牛約23,000頭が飼養され、牛乳生産量100,000tを超える酪農地域である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

村越敏春氏は、入植２代目の酪農経営者で、平成15年に父親から経営移譲された。妻の晴子氏は、東京都の非農家出身であるが、酪農ヘルパーの経歴を持ち、育児・家事と仕事を両立してきた。

村越夫妻は、平成17年にフリーストール飼養方式と搾乳ロボット・アブレストパーラー併設方式を導入した。この時の搾乳ロボットの導入は町内では初めての先駆的な事例として注目された。栄養豊富な自給飼料生産にも取り組み、高い飼料自給率を達成している。また、新しい技術を積極的に取り入れ、省力化と労働生産性に優れた経営を構築している。

・受賞者の特色

（１）自給飼料基盤に立脚した搾乳ロボットの活用

①　飼料分析に基づくＴＭＲ（混合飼料）調製、放牧利用、乳量に応じた濃厚飼料の個別給与を行い、潤沢な草資源を効率的に利用している。搾乳ロボットを導入しても、乳量増加を求めず、自給飼料給与割合の高い経営を維持している。

②　搾乳牛が自ら搾乳ロボットに入ることが効率的な稼働に重要なことから、搾乳牛の足腰の健康維持のため放牧を重視している。搾乳ロボット先進国のオランダでは放牧との組合せがあるが、国内では珍しく、参考になる事例である。

（２）機械導入による自動化や外部委託による超省力化、軽労化

搾乳ロボットや餌寄せロボット等の導入による作業の自動化、コントラクターや育成牧場への作業の外部委託により、搾乳牛１頭当たりの労働時間は47.7時間と全国平均104時間、北海道平均91.3時間に比べて驚異的に短い。

（３）高品質な自給飼料生産

早刈り等計画的な草地更新により、高栄養、高採食性の自給飼料生産に取り組んでいる。コントラクターに作業委託する草地には高栄養草種を導入し、刈り遅れた場合の品質低下を抑制している。自給飼料からの栄養摂取量が改善されたことから購入飼料が節減され、高いＴＤＮ（可消化養分総量）自給率と所得率を達成している。

・普及性と今後の発展方向

搾乳ロボット等の省力化機械の導入や外部組織の活用等を通じて労働負担の軽減を図り、超省力的な家族経営の酪農を実現している。村越夫妻は、今後も自給飼料の品質の向上に向けた植生改善、乳牛の繁殖管理や健康維持に最大限の努力を注ぐとしており、その姿勢を含めて優良なモデルと期待できる。